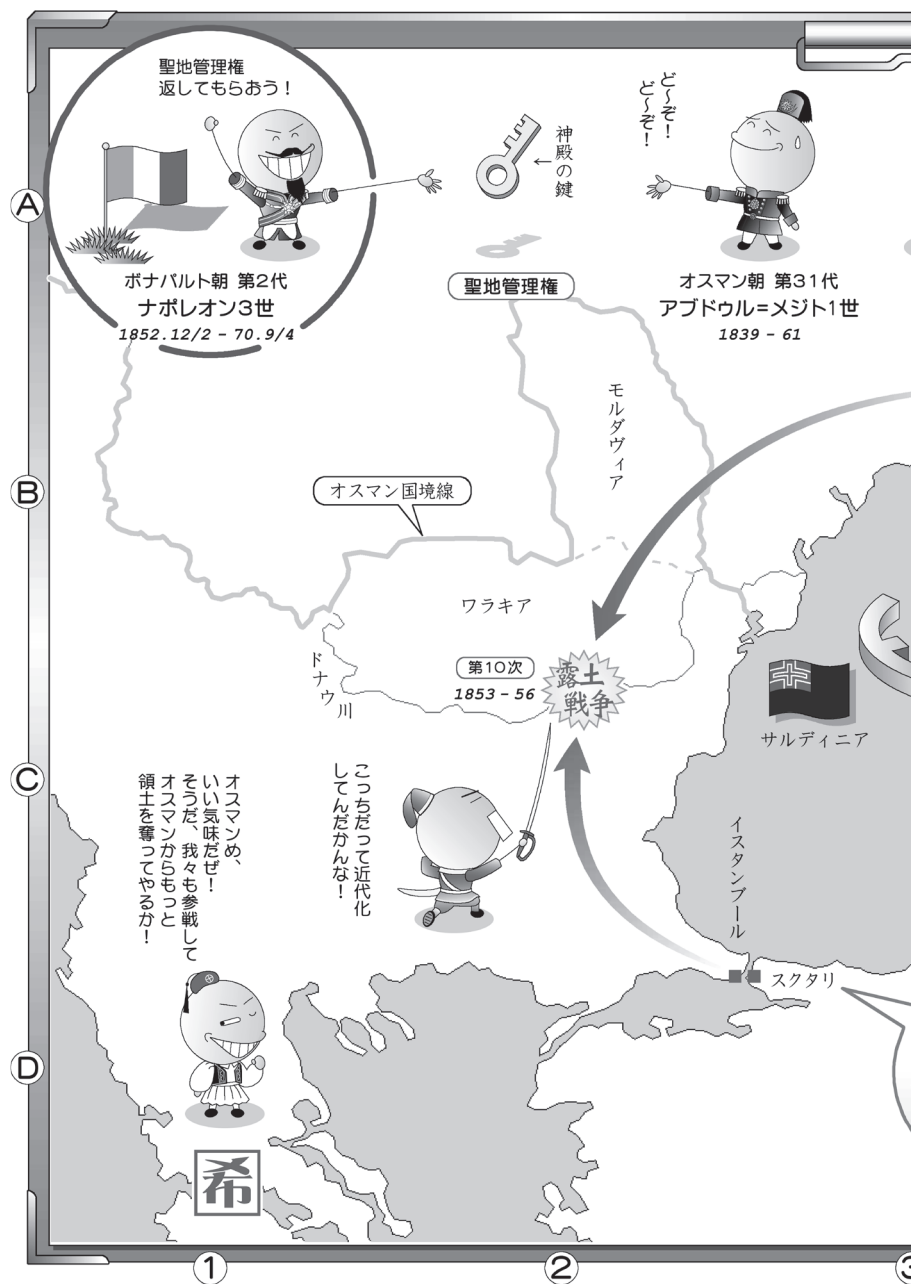
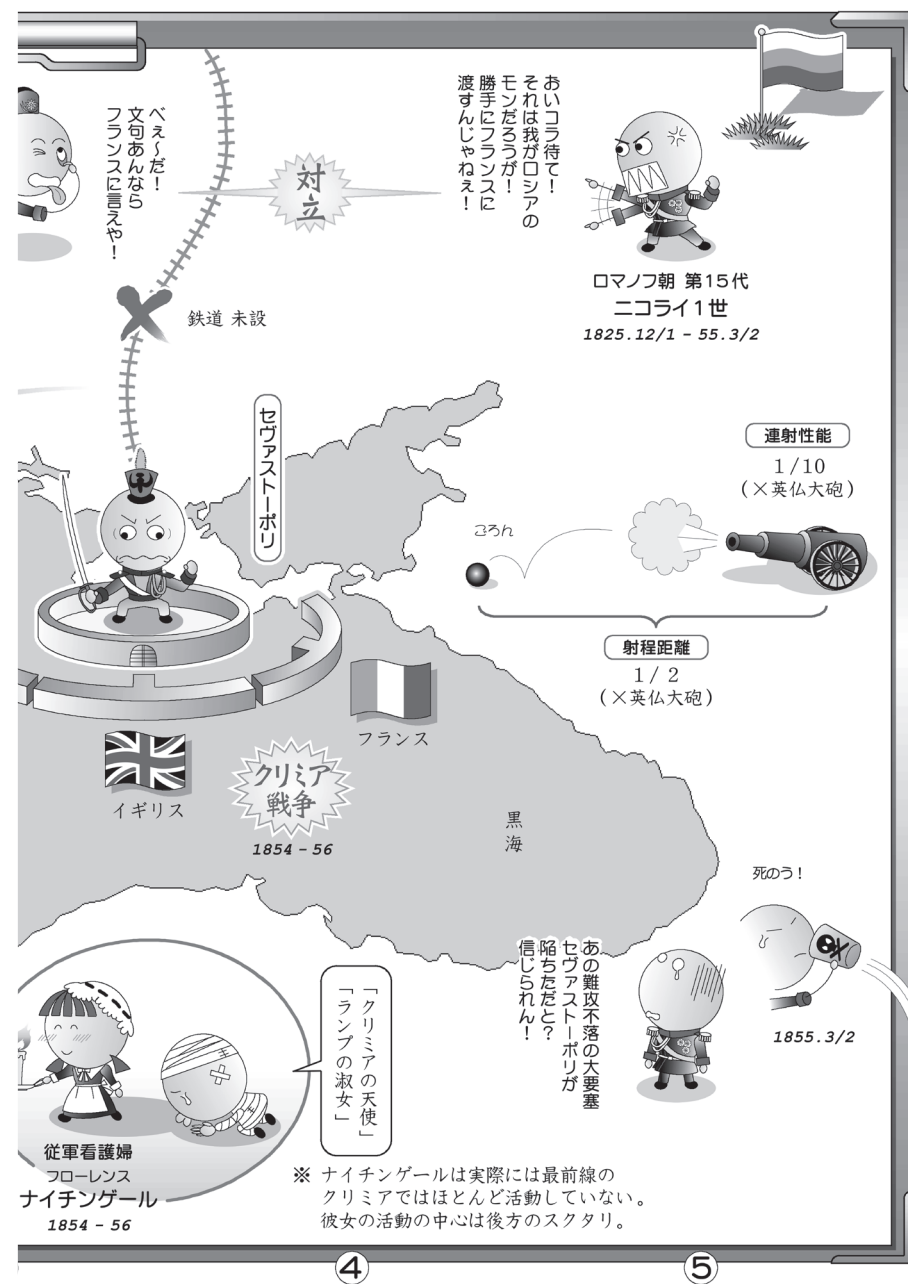


〈クリミア戦争〉



1853 ~ 56年



さて、いよいよ本幕から「オスマン滅亡のスパイラル」も最後の周回(5周目)に入り、いよいよ帝国の行く末も終局に近づいてまいりました。

オスマン帝国衰亡史は、1683年の第2次ウィーン包囲を起點として、「滅亡のスパイラル」を5周回ったあと、6周目に入ったところでリングが外れて滅亡へと驀進していくことはすでに解説いたしました。

初めはオーストリアとの戦争(*01)がきっかけでこのスパイラルが回りはじめ、2周目はロシア(*02)、3周目はギリシア(*03)、4周目はエジプト(*04)との戦争がきっかけで次の周回に入りました。

そして本幕5周目はふたたびロシアとの戦争となります。

きっかけは「聖地管理権問題」でした。
じつは遡ること300年ほど前、帝国がまだ絶頂の最中にあったスレイマン大帝の御世の1535年、フランスと「ベオグラード条約」を結んだことがありました(*05)。

このときオスマン帝国は、フランスに数々の通商特権とともに「聖地管理権」も与えています。

これは「聖地エルサレムにおける生誕教会・聖墳墓教会(*06)などの管理権を貸与する」というもので、これによりオスマンとフランスは永年にわたる友好がつづいていましたが、18世紀末、両国にヒビが入る事件が起こりました。

それが「フランス革命(*07)」です。

「国民が主君を殺す」など、そんなおぞましい危険思想が帝国内に流入してからは困りますからオスマンはフランスと国交断絶、当然、通商特権も聖地管理権も剥奪することになりましたが、ちょうどこのころ、オスマン帝国は第7次露土戦争の真っ最中で、ロシアはこの宙に浮いた「聖地管理権」に目を付けます。

(*01) 第5次/第6次 土土戦争。(第2章第2/4幕)

(*02) 第6次/第7次 露土戦争。(第3章第1幕)

(*03) ギリシア独立戦争。(第4章第1幕)

(*04) 第1次/第2次 埃土戦争。(第4章第3/4幕)

そこで、キュチュクカイナルジ条約が結ばれたときに「オスマンは帝国領内における正教徒の保護権をロシアに認める」という条項を付け加えさせ、ロシアはこれを盾にして、以後、執拗に「聖地管理権」を要求するようになり、ついに1808年、これを奪取することに成功していたのです。

こうした経緯により、「聖地管理権」はフランスからロシアへと移るようになりましたが、おめおめ利権を奪われたフランスは何をしていたのかといえば、試練つづきでそれどころではない状況がつづいていました。

10年の時を経てようやく“革命の嵐”が治まったかと思ったら、さらに10年にわたって“ナポレオン旋風”が巻き起こり(*08)、ようやくナポレオンが去ったかと思えば、今度は30年以上にわたってナショナリズム運動の暴風が吹き荒れ、革命・暴動・叛乱のお祭り騒ぎ。

しかし、フランス革命勃発より半世紀、ここでようやく落ち着きを取り戻したナポレオン3世は、ドサクサに紛れて奪われていた「聖地管理権(A-2)」の返還を要求します(A-1)。

オスマン帝国としても、過去何遍となく戦争を吹かけられて陰悪な関係の



(*05) ここでは詳しくは触れません。詳細は、前巻「第5章第2幕」をご参照ください。

(*06) イエスが生まれたところ、墓があったところと伝えられる場所に建っている教会。

(*07) 詳しくは、世界史劇場シリーズ『フランス革命の激震』をご参照下さい。

(*08) 詳しくは、世界史劇場シリーズ『駆け抜けるナポレオン』をご参照下さい。